

1 山里点描 (1) (『(身辺記)』)

①この辺りでは見知らぬ人でも、道で会えば軽く挨拶する。

分校に通う子供たちは、わたしたち夫婦を見つけると、声をかけてくる。「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」。

もちろん、わたしたちも大きな声で答える。「オハヨー!」「サヨナラ。気をつけて帰ってね。」
都会とは大違い。いつもほのぼのとする一瞬である。

②散歩中、村への小径を通り抜けた。子どもたちとボール遊びをしていた若い母親が、手を止めてわたしたち夫婦に向かって声をかける。「こんにちは」。

小さな子供たちもいっせいに真似をする。こんにちは。こんにちは。こんにちは……。こちらも瞬発を入れず、大きな声で返す。「こんにちは!」

③たまに「古き良き時代の日本」を求めて、別荘族や観光客が村を闊歩する。何かよそよそしい。声をかけようにも、フッと目をそらすので話しかけるタイミングを失う。

「こんにちは」と声をかけても、ビックリされたり、無視される。たいていは黙って立ち去る。

地場の人たちは経験からそれを知っている。だから「負のオーラ」を出すタイプを一瞬で見分けて、微妙に距離を取る。彼らには声をかけない。

④わたしたちが、村外れにアトリエを構えて十数年がたつ。「負のオーラ」はとっくの昔に消えている。里人が挨拶してくれるのは、わたしたちを一見の通過客ではないと認めた証^{あかし}。それがわたしたちの勲章である。

2 山里素描 (2) (『(身辺記)』)

①巣ごもり生活で、通販の利用が増えた。

薬用歯磨きから、プリンターのインク、クリアホルダー、空気清浄機、ウォーキング・シューズ、梅干など、生活用品のほとんどすべてを買っている。

②山里では品揃えが揃った靴屋、電化店、衣料品店などは望むべくもない。

車で40分ほどのショッピングモールへ行っても、わたしの探す商品はまずない。靴は底が

厚手でクッション性のよいものに限る。サイズは 28.5 の 4E。シャツは白で 3L サイズ、素材は綿 100 パーセントでなければダメ。

ところがこれが結構難しい。通販では容易に見つかるのがうれしい。

③通販にはまって、昔よりずっと目が肥えてきた。梅干しの塩分にも、ダシの素材にも随分とうるさくなった。

しかし、衝動買いが多くなった。近くに本屋がないので、本の通販は本当に便利。本屋で現物をとってみるのもよいが、通販だと関連本の一覧が出てくる。重宝だが、つい買いすぎる。加齢による衰えがそれに拍車をかける。娘から「昔のおじいちゃんに似てきから気をつけて」と注意されるが、どうも、最近しまりがなくなっている。

④そういうわけで、週に 2〜3 回は宅配がある。日に 3 回来ることもある。

宅配は同じ人がずっと続いている。担当の山田さんとは、十数年来の長い付き合いである。妻は彼が 20 代の時から知っている。彼はもう 40 代になった。

都会と違って、今でも時間指定はあまり意味がない。「2 時から 4 時」と指定をしても、在宅の気配があれば「こんにちは」といって入ってくる(!)。車庫に車があるか、カーテンが開いているか、物干しに洗濯物がかかっているかで、あたりをつけるらしい。

⑤山田さんは、朝に集荷場で荷物を積み込んで、このあたり一円をぐるぐると回っている。山里だから担当地域は広い。今はコロナ禍で忙しいので、受取人が在宅なら早く配達したいらしい。というわけで、時間指定をしても、たいてい早く来る。

こちらでも食事中だったり、仕事中だったり、いろいろ都合はあるので時間どおりがよいが、まあ目くじらを立てるほどでもない。

⑥コロナ禍の前は、もっとのんびりしていたが、それでも指定時間はお構いなしだった。

しかし理由がある。午後 5 時前には帰宅して、家族団らんを楽しみたかったらしい。

山田さんが「午後 6 時から 8 時指定」の荷物を 3 時ころもってきて、「早く家に帰ってゆっくりしたい」と、妻に話したそうである。当時はびっくりしたものだだった。

⑦この辺りは天城の山並みが広がり、近くを黒潮が流れる、気候は温暖である。生活全般がのほほ〜んとしている。こんなところで、ピリパリして生きるのは時代錯誤。仕事のペースを緩めて、生活を楽しまなきゃ・・・。

3 山里素描 (3) (『(身辺記)』)

①ここは過疎地である。殊勝な人が焼き芋会を開けば、5キロ、10キロ、時には15キロ先から、シニアが駆けつけてくる。1人で来たり夫婦で来たり…。みな人恋しい。だが、淡い関係である。「誰々さんは、このごろ顔を見ない」といっても、どこに住んでいるのかも知らないし、どうなったかも知らない。知らず知らずのうちに、メンバーは入れ替わる。深い関係になりようがない。死は身近にある。みな否応なく、死と馴れ親しんでいる。あきらめを胸に秘めて、何とか生きている。

②集まってくるシニアの大半が病を抱えている。例外的に親しくなったJさん、Iさん、Hさん、Kさん夫妻も基礎疾患を抱えながら、日々を生きている。わたしもいつ仲間入りしても、何の不思議もない。

③だから、話もとりとめもなく、刹那的(?)である。この前もこんな話になった。

〇〇さんが、脳溢血で倒れて入院したらしいわよ。

〇〇さんて誰？

いつも赤いジャンパーを着ている人。

あらヤダ！

④このトピックは「あらヤダ！」の一言でおわり。すぐ次の話題に移る。朝の瞑想がいかに体によいとか、瞑想のおかげで、気管支喘息が軽快したとか・・・。

冷たいわけではない。ただ、同情の言葉はここではウソっぽい。生死に直面した人に、他人ができる事は何一つない。そんな冷めた感覚がある。

わが家ではしばらくの間、「あらヤダ」が食卓の話題をさらった。

4 真冬の夜の戦慄 (『(哲学は美味しい)』)

①深夜、トイレに起きた。カーテン越しに、真昼間のように明るい光が射しこんでいる。そんな筈はない。ここは、夜ともなれば漆黒の暗闇のはずである。何だろう？

いぶかしく思って、カーテンを開けた。途端に、煌々とした月の光が降り注いでくる。

一月の満月が天空に輝き、まるでサーチライトの束を集めた様な明るさ。月の光が明るすぎて、満天の星影が薄い。

こんな明るい月の光を見たのは生まれて初めてである。「未知への畏れ」を感じるほどの明

るさだった。

②二階の窓越しに見る光景は、上下に真二つに分かれていた。

正面は、満月の光があまねく満ちわたる光の世界。

眼下は、雑木林やわが家の庭が影絵のように沈む暗闇の世界。

③シュールな光景だった。光は満ち溢れていたが、それは死の世界だった。

これは現実だろうか？　このような自然の相貌を垣間見たことは、かつてない。

実在する光景とは到底思えない。

人々は眠り、この景色を見ているのは、この世にわたし一人。誰も見たことがない世界を見ている。それは不思議な感覚だった。わたし一人しか知らない世界が、果たして存在するといえるのか？　しばらくの間、わたしは慄然とし立ちつくした。

④見慣れた光景が、深夜にこのような異形の相貌をもつとは、今まで予想もしなかった。

自然や世界は、わたしの認識をはるかに超えた、広がりや深淵をもつらしい。そう思うと、眠気もどこへか吹きとんでしまった。

⑤翌日はいつもの通りの朝だった。快晴である。

庭には、相変わらず季節外れのシャクナゲが咲いている。垣根にはサザンカが白と赤の花をつける。つばみをもち始めた沈丁花がかすかに香る。

リスがナラの大木にのぼり、コジュケイが数羽、茂みの中を走り去る。ヒヨドリが冬青（そよご）の赤い実をついばむ。

そこは真冬でも生命にあふれた世界だった。

5 わが友モンテーニュ（1）（『処世論』）

①モンテーニュの「随想録」を買って、10 年ぐらい積んでおいた。一般教養書のつもりだったが、出てくる人名は知らない人ばかり、話題もなじみのないもの。読み始めてすぐ放り出してしまった。当時はまっていた司馬遼太郎さんの面白さとは比べようもない。

②気が変わったのは、30 代の後半である。久方ぶりに随想録をパラパラとめくっているうちに、ふと「落馬のエピソード」に目がとまった。

たしか 50 代の頃、モンテーニュが馬から落ちて、しばらく気を失った時の話である。後

から振り返ると、失神している間は、当然だが何の恐怖も感じなかった。死ぬ時もこんなものだろう、だから死を恐れる必要はない。40 年以上前の事だから、今となつてうろ覚えだが、とにかくそんなニュアンスだった。

③「何だよ…。モンテーニュだって意外に単純じゃないか」。そんな印象を受け、彼がぐつと身近になった。わたしにとって「思想の巨人」などはウソみたいな話だった。

④当時わたしは、眼の手術を終えて間もない頃だった。その当時はレーザー手術もなく、眼にメスを入れての大手術だった。

「失明の恐れもある」といわれたので、手術前は極度の不安にとらわれていた。だが、手術が始まってみると、眼にメスが入っていると分かるのに、夕暮れの風の湖面を見ているような、穏やかな気持ちが手術中ずっと続いた。

I 時間の手術が終わると、わたしはすぐドクターに聞いた。

なぜこんな穏やかな気持ちになれるんですか？

麻酔薬のせいですよ。よく効きましたね。

ドクターは事もなげに答えた。どうやら鎮静剤と鎮痛剤を打つたらしい。

⑤人間の心って薬でコントロールできるんだ！ 単純といえば単純だが、そう知ってわたしは死があまり怖くなくなった。いざという時は、鎮静剤を打ってもらえば死の恐怖から逃れられる。今という緩和ケアである。

⑥こんな経験をしたばかりだったので、モンテーニュの「落馬のエピソード」を知って、ひどく親近感を感じた。「何だモンテーニュだって、オレとたいして変わらないじゃないか」。これをきっかけに、少しずつモンテーニュを読み始めた。

⑦これがモンテーニュにはまうたわたしの原点である。だから、彼を上を仰ぎ見るような気も、モンテーニュを尊敬する気もさらさらない。なるほど、彼には、装飾物を削ぎ落として本質を見る類まれな才がある。また、事象を多様な視点から見る驚くべき柔軟性もある。

しかし、モンテーニュ研究者は、彼を等身大で見えていないと思う。あんなに持ち上げていては、彼の真価を知ることはできない。随想録を読んで楽しむこともできない。それは彼の思考から最も遠いところにあるはずである。

⑧わたしは、知識人/有識者/権威者に対する「下から目線」を全く持っていない。偉そうなことをいっている人たちも、ちょぼちょぼである。そう見切っている。

このように権威を疑うようになったのは、まぎれもなくモンテーニュのおかげである。

わたしにとって、彼は世間をはすかいに見る才にたけ、また、交渉者としても手練手管にたけた、やんちゃな友にすぎない。(次回に続く)。